

怒りは美しさ

ある日突然、知らない人から「こんなに酷いのです！助けて下さい」と言われたら、果たしてどう対応するであろうか？「こんなに？」とは「どんなに？」、「酷い！」とは「何が？」といったところから様子を探りはじめ、次第に全容を突き止めていくといった所であろうか。聞けば「財布の中身が空っぽ」「家もなくさ迷っている」「借金取りに追われている」等々の話がよくある。労働運動の場面でも、「こんなに酷い賃金」「こんなに酷い労働条件」「こんなに酷い会社」といったように「酷い」という言葉が大変よく使われている。

昨今、あまりにも酷いという言葉がよく使われているので、酷いという言葉も聞いても、ある意味耳が馴れてしまっていて、聞き流してしまう感もあるのだが、しかし、酷いとは一体何であろうか？酷いという言葉は形容詞の単語であり、私たち1人1人の主観と大きく関わっている言葉だ。だから、一概に定義付けの様なことをするのは難しい。しかし、酷いという言葉は、何かと比較して度が過ぎているという言葉であるので、問題は言葉の使い手の頭の中にある基準、あるいは現実、何と比較しているかであろうと思う。

例えば、所持金（全財産）が1,000円しかない人がいた場合、預金が100万円ある人から見れば大変酷い話となるが、所持金

が10,000円しかない人から見れば、自分とほぼ同じという話しであろうし、所持金0円の人から見ればお金があってよいという話しになってしまう。

酷いという言葉は、集団内に一定の共通認識があり、その集団から一部が何らかの理由で外れた場合等には使えるが、集団の共通認識が崩れてしまっている場合等ではあまり意味をなしてこない。また、酷い状態とは正反対の良い状態、元々の状態、更に良い状態が分からなければ、どう酷いかは分からないものである。

酷い状態というものが伝わっていくには、酷い状態の認識も必要だが、もう一方、酷くない状態の認識、理想の状態の認識が必要となってくる。そして、手の届く範囲の次のステップを具体的に描いて見せることも必要になってくるのではないだろうか。

確かに、秘密保護法、派遣法改悪、憲法解釈変更による集団的自衛権行使・・・と酷い話しは続いており、悪法の問題点を分析して見せることは必要だが、その一方、秘密の不用な社会とは具体的に何か？派遣法の不用な社会とは具体的に何か？集団的自衛権の不用な社会とは具体的に何か？何なのであるか？と。

戦後、民主教育を曲がりなりにも受けて来た世代からすれば、基本的人権は尊重される、

共に

社 海樹

最低限の文化的な生活は保障される・・・を当たり前のものとして受け入れ、その具体化として、会社に勤めれば給料は年齢と共に上がっていき、賃金の後払いとしての退職金が用意され、マイホームが持て、他人と争わなくても老後がのんびりと過ごせる、戦争と関わらない世界がある程度実感できていた。しかし、現在の年収100万円前後のアルバイト・派遣労働者からすれば、働いても賃金は上がらず、賃金の後払いであったはずの退職金は始めから無かったものにされ、将来住む家は約束されず、他者を蹴落すことでもしなければ仕事も得られない状態に追い込まれており、会社に残ったサラリーマンも月数百時間の残業・ただ働きで家にも帰れずローンだけ払わされている状態に追い込まれている。その中で、良い状態、あるべき状態、理想の状態といったものを完全に失ってしまっているように思える。人間良い状態を見失ってしまうと、怒りもなかなか湧いてはこない。

食事とて、今やカップラーメン・100円ハンバーガー・菓子パン等が主流になりつつあり、それ以外の食事を見失ってしまっている感がある。1回の食事にかかる費用が100円から500円程度が現実である以上やむを得ないことではあると思うが、しかし、日本には本膳料理という歴史的なコース料理があったのであり、現在でも政財界の面々は、

日々、饗応料理（会席料理のこと）を堪能しているのであるから、労働者の私たちがカップラーメンオンリーの世界に甘んじている必要はないということに自覚する必要があるものであり、饗応料理に手が届かなくとも、ポストカップラーメンの具体化を図っていくべき話しなのだ。

今必要なことは、諸悪法の問題点を知ることと同時に、身の周りの美しさ、より良い生活を取り戻していくこと、描くことではないのだろうか。かつては夏休みと言えば、ウサギ小屋に住んでいる労働者と揶揄されながらも、家族で海水浴に行ったり、虫取りに行ったり、登山をしたり、町をあげての盆踊りがあったり・・・であった。しかし、今やそのほとんどが成立しなくなっている。

ローンがなくても住める住宅、年収100万円でも行ける海外旅行・・・等々を企画し、カップラーメンから始める最低限度の文化的な生活・日本国憲法、ネットカフェから始める個人情報保護・秘密保護法の問題、スマホゲームから始める戦略・集団的自衛権問題・・・といったものを大きく描くことができたなら、日本社会も少しは動いていくのではないだろうか。

怒りというものは、自分の中の美しさが枯れてしまうと湧いてはこない。怒りは美しさと共にある、そうは思いませんか。